

General Englishの教授法

—ハーバード大学公開講座の事例—

高千穂安長

はじめに

- 1 公開講座の募集要項とポイント
- 2 クラス選抜方法
- 3 授業内容
- 4 授業の効果と日本の場合の制約
- 5 GEの教授法と課題

はじめに

平成3年3月より12月までの9か月間、ハーバード大学法律大学院 (Law School) の国際租税プログラム (ITP: International Tax Program) にVisiting Scholarとして在籍した。これは、国際開発高等教育機構 (FASID: Foundation for Advanced Studies of International Development) の人材育成のための海外派遣プログラムの研究フェロープログラムに合格したことにより実現した。

現地では、ITPでの租税に関する研究を行う傍ら、ビジネススクール (HBS: Harvard Business School) の在校生の平均スコアと言われるTOEFL630点よりは低いが、それでも610は望まれる Law School の英語能力に近付くため、ハーバード大学公開講座 (以下公開講座: Harvard University Extension School) の「第2外国語としての英語」 (English as a Second Language) も受講した。本稿は、その時の体験を基にした、General English (以下GEと略する) の「教授法」に関する実証的な論文である。

1. 公開講座の募集要項とポイント

English as a Second Languageの教育に当たり、どのような募集文面を用意しているかは、GEの教育において重要な鍵となると考えられる。つまり、どの様な

目的のために、どのような方法で教育を行うかという、教授法に密接に関わる一番のポイントが示されているからである。以下に少し長くなるが、当該箇所を紹介する。これは、公開講座の募集パンフレットに記載されていたものを忠実に再現している。

English as a Second Language

ESL E-G English as a Second Language: Four hours per week

Noncredit \$395. Limited enrollment.

All classes meet two times per week.

Fall term (23000): Anne R. Dow, M.A., Director of Program of English as a Second Language in Continuing Education, Harvard University, and Faculty.

Preparation for work and study in the United States. Classes for students of every level, beginner to advanced. Small group instruction (average class size 15). Individual attention and supervised practice. Limited use of language laboratory.

- Combined Skills. Designed to develop all language skills(listening, speaking, reading, and writing), to expand knowledge of structure and vocabulary, and to build fluency in spoken and written English based on the needs of the group. Classes at all levels from beginning to advanced. Assignment based on placement test scores.

- Listening and Speaking. Practice in listening fast, idiomatic English and instruction and practice in word choice, speaking style, rhythm and intonation, conversation, discussion, and preparation. Open only to students with intermediate or advanced placement test scores.

- TOEFL Preparation. Intensive grammar review, practice in listening and reading, and instruction in test-taking strategies required for the international Test of English as a Foreign Language(TOEFL). Open only to students with intermediate or advanced placement test scores.

- American Literature. Why are Americans the way they are? In this class,

students will read and discuss classic and contemporary American literature in order to try to find out. Along the way, students will work on vocabulary and reading comprehension, as well as analytical, writing, and discussion skills. Good preparation for American university study. Open only to students with advanced placement test scores.

・ Writing. Instruction and practice in writing clearly and correctly in a variety of styles (narrative, descriptive, expository, argumentative) for general purpose. Open only to students with advanced placement test scores. Separate writing classes for university or scholarly academic writing (emphasis on expository and argumentative styles and associated format conventions) will be created if a sufficient number of students are interested.

この要項で明らかな様に、公開講座ではGEの対象者として、初心者から相当に進んだ人までを対象としている。また、学習頻度は、1週4時間、1回2時間のクラスとなっており、そのクラスは、総合クラス、会話と聞き取り、TOEFL対策、アメリカ文学、作文の5種類に分かれている。それぞれの目標は上記の通りである。高度の英語力を要求されるハーバード大学において、初心者をもその対象としていることから、公開講座のGEは、大学での履修を目的としたものだけではなく、広くGEの実力向上をめざしたものと考えられる。なお、公開講座や英語学習者用にラボが用意されており、学生証を見せれば無料でテープやビデオが利用できる。このように、サポーターティングファシリティも充実している。

2. クラス選抜方法

TOEFLと同様のテスト（注1）が行われ、そのスコアによりクラス編成が行われた。なお、テスト問題および解答用紙は終了後回収されたため、ここでは提示出来ない。

ハーバード大学公開講座は人気が高く、受験者は700人程度いたと聞いている。

3. 授業内容

(1) クラス編成

筆者は、A（全くの初学者）からX（相当高いレベル）のクラスの内、intermediateレベルであるSクラスになった。因みに、Xクラスに配属となった日本人女性の話では、討議やスピーチにおいて、英語のレベル云々ではなく、中身が極め

て高度なものを要求されたためについて行けず、ランクを自ら下げたということである。このことから、高度の英語力を持つ人に対しては、大学での講義や討論に参加しうる「内容」に踏み込んだ教育をしていることが解る。なお、Intermediate classは英検準1級程度という感じであった。

Sクラスは13名（うち日本人3人）であり、後はイタリア人、コロンビア人、プエルトリコ人、ラオス人、韓国人などと多彩で、20代が多数を占めていた。また、女性が10人とそのほとんどを占めていた。

(2) 教材

教材はTIME, “Understanding and Using English Grammar”, “Life Studies (David Cavitch)”, その他プリント、ビデオ・テープなどで、それぞれ使い方が異なった。

(3) 授業の実際

クラスの雰囲気伝えるように記述してみよう。

①初日

13人全員が一人1分程度の自己紹介をし、チューターは今後の授業の進め方を示した。その後購入テキストの指示があり、自由論題（女性が多かったことから、セクシャル・ハラスメント）で各自が数分間ずつスピーチを行った。その後簡単なゲームやクイズを行った（注2）。

②二回目～最終回の前

a. TIME

TIMEの中から、1テーマを選び、数分間各自が読んだ後、議長を受講生の中から選抜（実際はチューターが指名）し、議論を行った。以後は、授業終了後に次回のテーマがTIMEの中から指定され、予習を前提とした議論となった。これは、最終回の前まで続けられた。2回目以降も、女性に関心を持つ墮胎やイスラム圏の女性のベールの可否などのテーマが多かった。

b. “Understanding and Using English Grammar”

例題をチューターが解説した後、Exerciseをクラス・メンバー全員に順繰りに答えさせた。当日どの章をやるかは当日の授業開始後決まるために、予習の範囲は相当広範囲に亘った。国別対抗的な雰囲気も生まれ、勉強量は相当なものになったことから、この様な教授法も、受講生がある程度のレベルにあり、かつ勉学に対する動機付けがなされている場合は極めて有効な方法と言えよう。

この文法の授業も毎回行われた。

c. “Life Studies (David Cavitch)”

短編からなるこの本の、あるテーマについて精読の指示がチューターから出され、全員の予習を前提に授業が行われる。一人がテーマについての感想、意見を5分程度で紹介し、それに対してクラス・メンバーが賛成、反対、その根拠などについて討議を行った。沈黙しているメンバーに対しては、発表者は意図的に意見を求める様チューターから指示が出された。さらに、この討議を踏まえて、自分の意見を1～2ページに纏めてくるようチューターは要求し、レポートについては、文法、表現法、意見についてのコメントをつけ返却してきた(注3)。

これは最終回の前まで続けられた。

d. プリント

トピックスについてチューターがプリントを用意し、討議の材料とした。テーマは、エッセーやショート・ショートが多かった。当日配布され、10分間で読まされ、その後30分程度議長を決めて議論した。全員の発言が終わるまで続けられた。長広舌のメンバーに対しては他のメンバーからのブーイングとチューターから「要領良く」という指示が出された(注4)。

この授業は、ビデオ・テープ作成が始まると中止された。

e. ビデオ・テープ作成

クラス・メンバーがそれぞれグループを作り、テーマを決めてビデオを作成することであり、講義期間の後半から始められた。グループは結果的に国籍または出身国の近いもの同士の組み合わせとなった。テーマは、ハーバード大学紹介、ボストンの紹介、アメリカン・フットボール紹介などであった。

メンバーおよびテーマ決定後は、制作期限が設定され、各グループ毎にシナリオ作り、インタビューアーやレポーター、音楽などの役割分担を決めた。

筆者はハーバード大学紹介をテーマとしたグループに入ったが、大学当局に対する撮影許可の取得やインタビューのアポイント取り、場合によっては許可願などの文書作成なども要求されることから、実践GEカの取得の観点からは、極めて有意義であった。

完成後は、グループ毎にプレゼンテーションを行い、ビデオを観賞し、意見を述べあった。

これら教材とは別に、小テストが随時行われた。

③最終回

各自に対して修了証が交付され、ミニ・パーティが行われた。修了証は2

回欠席までの人に対し、授業の発表態度や技量の進歩の状況（含む小テストのスコア）をチューターが勘案し、大学当局の認可を得て発行された。

ミニ・パーティでは、受講生の今後の身の振り方や授業についての感想などを述べあう、和気あいあいとしたものであった。

4. 授業の効果と日本の場合の制約

以上の公開講座の教授法は、ある意味でオーソドックスであり、新味に乏しいという感想が正直な所である。しかし、日常が英語で溢れており、自動的に英語の力は付くと考えられる外国（勿論、昨今の若者のように日本人同士で群れ、日本語しか使わないという状況は除くとして）であるが故に、日本で行うより遙かに効果があがる。ただし、クラスは、力量別編成になっているため、実力的には平均化していると考えられるが、読解力と会話力は必ずしも正比例はしないし、興味を持つテーマも異なる。また、考える力やバックグラウンドの知識も異なるし、老若の違いもある受講生を、1回2時間の中で効果的にスキル・アップさせるには、チューターに相当の力量を要求される。また、受講生の協力も不可欠となる。

日本でのGE教育のハンディキャップとしては、周辺環境が日本語であり、易きに就きやすいこと、考え方が似ている日本人が相手であり議論が白熱しにくい。総じて完璧主義が多い日本人は沈黙を守る傾向があり、チューターに相当の技量が要求されるなどがあげられよう。

5. GEの授業法と課題

授業法としては、ビデオを使い創造的な作業を通して読み、書き、聞き、話すの実践を最終工程とし、事前工程としてテキストを使った文法力向上、読解力向上が望まれる。日本の場合は、ネイティブが相手とはならないが、アジア諸国の英語と同様、コミュニケーション能力の向上を目指す観点から、会話においては、（特に発展段階では）文法の厳密さにこだわらず、伸び伸びと話させる工夫が必要であろう。（公開講座においても、意味不明以外は文法的な間違いを指摘し、議論を中断させることはなかった。）

読解力の向上には多くの異なったタイプの文章を読ませ、意見を述べさせることが求められる。読んだ後で意見として述べる必要があれば、読み手も勢い真剣にならざるを得ないからである。聴解力の向上には、テープ学習を並行的に行わせることが効果的である。昨今は著名文学作品の朗読がテープまたはCDに吹き込

まれたものが多く発売されており、自習用に活用される態勢を作るべきであろう。

(注1)

通常のTOEFLとほとんど同じ内容の試験であった。400人以上の受験者がいたため、大講堂でも一回では収容しきれず、時間差を設けて二回に分けて実施された。会場は日本語、スペイン語などが飛び交い騒々しかったが、真剣なまなざしの人が多かった。

(注2)

例えば別紙“The Great Bracelet Mystery”など

(注3)

例えば別紙“Life Studies (David Cavitch)”の“It’s just too late”の添削例を参照されたい。

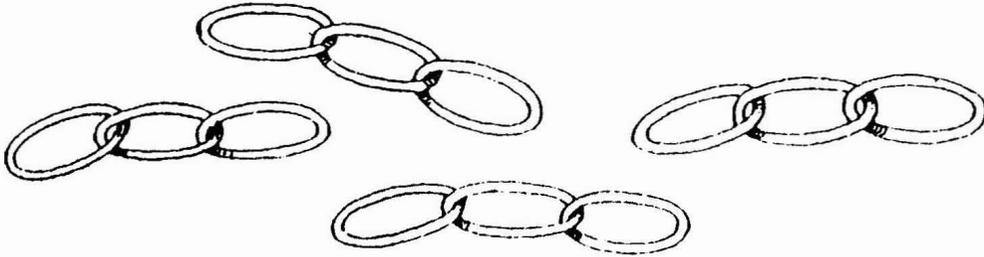
(注4)

日本人はおしなべて口数は少なかったが、各自目的を持って参加しており、日本人同士固まったり、日本語を話したりということはなかった。

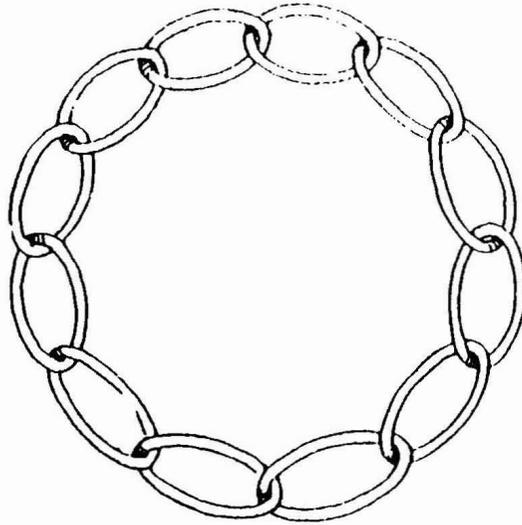
他国の方は、間違いを指摘されることには頓着せず、会話や討議のイニシアティブをとることを心掛けていた。

(たかちほ・やすなが／玉川大学講師／さくら総合研究所上席主任研究員)

〔資料〕

35 *The Great Bracelet Mystery*

A lady had four pieces of gold chain. Each piece contained three links. She took the four pieces to a jeweler and asked him to join them together to make a bracelet, like this:



"I'll have to charge you a dollar for each link I cut apart and weld together again," the jeweler said. "Since I have to cut and weld four links, the job will cost you four dollars."

"Oh no it won't," said the lady (who was very good at puzzles). "It should cost only *three* dollars because you can make the bracelet by cutting and welding only *three* links."

The lady was right. Show how the job can be done in just the way she said.

Calvin Trillin

IT'S JUST TOO LATE



CALVIN TRILLIN (b. 1935) grew up in Kansas City, Missouri, and attended Yale University. He worked as a reporter for *Time* magazine, and from 1963 to 1982 he was a staff writer for *The New Yorker*. His regular reports of his travels around the United States focused on daily life, including where and how Americans eat. These observations were collected in three books on food in America: *American Fried* (1974), *Alice, Let's Eat* (1978), and *Third Helpings* (1983). The humorous columns he wrote for the *Nation* are collected in *If You Can't Say Something Nice* (1987). In 1984 he published another collection of observations drawn from *The New Yorker* on the ways Americans get killed, for this macabre topic, according to the author, often illuminates the way people live. In the following chapter from *Killings* (1984), Trillin examines the death of a teenage girl who was killed in a car chase and accident.

Knoxville, Tennessee

March 1979

Until she was sixteen, FaNee Cooper was what her parents sometimes called an ideal child. "You'd never have to correct her," FaNee's mother has said. In sixth grade, FaNee won a spelling contest. She played the piano and the flute. She seemed to believe what she heard every Sunday at the Beaver Dam Baptist Church about good and evil and the hereafter. FaNee was not an outgoing child. Even as a baby, she was uncomfortable when she was held and cuddled. She found it easy to tell her parents she loved them but difficult to confide in them. Particularly compared to her sister, Kristy, a cheerful, open little girl two and a half years younger, she was reserved and introspective. The thoughts she kept to herself, though, were apparently happy thoughts. Her eighth-grade essay on Christmas — written in a remarkably neat

hand — talked of the joys of helping put together toys for her little brother, Leo, Jr., and the importance of her parents' reminder that Christmas is the birthday of Jesus. Her parents were the sort of people who might have been expected to have an ideal child. As a boy, Leo Cooper had been called "one of the greatest high-school basketball players ever developed in Knox County." He went on to play basketball at East Tennessee State, and he married the homecoming queen, JoAnn Henson. After college, Cooper became a high-school basketball coach and teacher and, eventually, an administrator. By the time FaNee turned thirteen, in 1973, he was in his third year as the principal of Gresham Junior High School, in Fountain City — a small Knox County town that had been swallowed up by Knoxville when the suburbs began to move north. A tall man, with curly black hair going on gray, Leo Cooper has an elaborate way of talking ("Unless I'm very badly mistaken, he has never related to me totally the content of his conversation") and a manner that may come from years of trying to leave errant junior-high-school students with the impression that a responsible adult is magnanimous, even humble, about invariably being in the right. His wife, a high-school art teacher, paints and does batik, and created the name FaNee because she liked the way it looked and sounded — it sounds like "Fawnæ" when the Coopers say it — but the impression she gives is not of artiness but of soft-spoken small-town gentility. When she found, in the course of cleaning up FaNee's room, that her ideal thirteen-year-old had been smoking cigarettes, she was, in her words, crushed. "FaNee was such a perfect child before that," JoAnn Cooper said some time later. "She was angry that we found out. She knew we knew that she had done something we didn't approve of, and then the rebellion started. I was hurt. I was very hurt. I guess it came through as disappointment."

Several months later, FaNee's grandmother died. FaNee had been 2 devoted to her grandmother. She wrote a poem in her memory — an almost joyous poem, filled with Christian faith in the afterlife ("Please don't grieve over my happiness/Rejoice with me in the presence of the Angels of Heaven"). She also took some keepsakes from her grandmother's house, and was apparently mortified when her parents found them and explained that they would have to be returned. By then, the Coopers were aware that FaNee was going to have a difficult time as a teenager. They thought she might be self-conscious about the double affliction of glasses and braces. They thought she might be uncomfort-

Submitter: Yasunaga Takachiho

11 November, 1991

Title: It's just too late

Author: Calvin Trillin

Opinion:

deeply strongly
This essay struck me **heavily**. This author describes a tragedy which we find easily in ordinary life. I can follow this essay [in common.]

with a
This essay presents me a serious problem because I have two daughters. In Japan, most parents try to their daughter enter famous private schools to protect their daughters from many temptations. Such as? I can understand their mind recently [that have same anxiety.] *because I have had felt the same anxiety.*

In
From my opinion, girls, especially, "good, elegant" girls, tend to drop out (from school?) faster than usual girls. This is because they have not enough immunity. *drop out usually refers only to school or program do not have enough protection.*

is
When she had bad friend both boys and girls, she influenced as if she has no mind! This is because girls always afraid isolation from their peers members. (friends/peers) *was*
Parents cannot do anything. Let alone is the best way? *Know what the best solution is.*
I heartily envy the class member's parents because they have such excellent grownup children! *of you*

Sometimes
I wish I had sons! Daughter is "emotional animal" and is very difficult to treat. (Believe me, sons can be emotional too!!)

In Japan, if parents are very friendly, their child should not drop

a little nuclear { out. But after read this essay, I felt not only parents friendly but friend is very important factor. realized their parents (should act as friends should be friends to their children)

When I ^{return} back to Japan, I have to think about my lovely daughters and to protect ^{them} from such a miserable figure. experience? ... parents and friends both

have much influence on their children
Above ... general opinion or emotion I felt.
Analytically speaking, having felt always pressure from her parents of excellent child, she has to be an

to be a "perfect"

Very well thought out and expressed in general!

あとがき

後段の論者、高千穂氏が次のような感想を寄せてきた。

筆者は、国際開発に対する研究が主であったが、このGE公開講座を実りあるものにするためには、相当な予習、復習が必要であり、結果的に体重が15kgも減少する程の学習をすることになった（特に夜眠くならないように、夕食を早めにかつ少量にしたことが大きかった）。（筆者注、元々太り過ぎであった？）

冗談は別として、筆者には同氏の苦勞がよく解る。筆者自身、中年を過ぎての米国大学院生であって、統計学、コンピュータなど若年時に習ったこともない必修科目の履修は、正に苦痛の連続であった。

また、履修を要求されたBE 1 科目 (Advanced English Composition and Introductory Business Communications) は、ビジネス英語教師のプライドとして、A-の評価を得るのに大変苦勞したからである。しかし、これは後に役立つことになった。

「General Englishなんて聞いたこともない」といった妄言に対しては、高千穂氏のハーバードの修了証（後掲）が手厳しい痛撃を加えてくれる。曰く、General English as a Second Language！

それにしても with distinction（優秀）の成績で修了とはご立派。総合成績で Graduation with honors（優等）に僅かに及ばなかった筆者としては、たとえ1科目であつてもうらやましい限りだ。体重15kg減少も宜なるかな。呵々。

（橋本光憲）

HARVARD UNIVERSITY
FACULTY OF ARTS AND SCIENCES

CONTINUING EDUCATION
OFFICE OF THE DEAN



This is to certify that during the Fall Term
of the academic year 1991-92

Yasunaga Takachiho

enrolled in and completed with distinction
General English as a Second Language,
a non-credit combined-skills course
which met eight hours per week for twelve weeks.

Anne P. Dow
Director
English as a Second Language

Michael Shinagel
Dean
Continuing Education